新井田小

主体的・対話的で深い学びのできる子の育成

～問題解決的な授業展開を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　成田　　明彦

１　研究主題について

本校では、教育目標に「夢に向かい　考え　行動する子」、努力目標に「考えぬく、なかよく、がんばりぬく」、学校目標に「他者や集団との関係の中で、自分に自信をもち、生き生きと活動できる子どもの育成」を掲げている。

昨年度まで、児童の思考に沿った学習問題「問い」を生み出す工夫、その問いを共有し課題解決の「見通し」をもたせる工夫について研修を進めてきた。問いを生み出す場面では、教材を工夫したり、発問・指示を工夫したりしたことで思考のずれが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題解決に取り組む児童の姿が見られた。また、問いを共有する場面では、児童の発言や思考を板書などで可視化したことで、思考が整理され課題解決につながった。また、既習事項との関連の仕方を工夫したことで、どの児童も安心して課題解決に取り組むことができた。

その一方で、学習課題「問い」の設定に時間がかかり、自力解決の時間が十分に確保できないこと、多様な考えを認めると本時のねらいからそれてしまうこと等の課題も多数あがった。

課題はあるものの、問題解決的な学習を進めてきたことで、主体的に学習に取り組む姿勢が身についてきている。そこで、今年度も研究主題及び副題を継続し、昨年度までの研究成果を生かしつつ、課題としてあげられたことに留意しながら、問題解決的な学習の充実・改善を図っていくこととした。日常の授業実践の中で、目指す児童像の育成につなげていきたい。

２　研究のねらい

主体的に学ぶ子の育成のために、問題解決的な授業展開をどのように工夫していけばよいかを、国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業のねらいを明確にし、問題解決的な授業展開の中で様々な手立てを工夫することによって、自分の考えをもち、主体的に学ぶ子を育成することができる。

４　研究内容

(1) 児童の思考に沿った学習課題「問い」を生み出す工夫

ア　児童の興味・関心を高める教材を工夫する。

イ　発問・指示を工夫する。

(2) 「問い」を共有し、課題解決の見通しをもたせる工夫

ア　思考を助けるために、思考過程の可視化「見える化」をする。

イ　既習の考えを引き出しながら、考えの見通しをもたせる。

ウ　解決方法の見通しをもたせる。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
7	１４	第１回授業研究（２学年） 算数「図を使って考えよう」 授業者　教諭　近藤睦美	分からない数を□とし、問題文の順に沿ってテープ図に表すことで、加法になるか減法になるかを考えさせた。
9	1	第２回授業研究（４学年） 国語「ごんぎつね」 授業者　教諭　泉山武志	ごんはどんなきつねか「○○ぎつね」と考えさせることで、ごんの気持ちの変化を読み取らせた。
9	8	第３回授業研究（３学年） 国語「すがたをかえる大豆」 授業者　教諭　宮古和行	「問い」がないことに気づかせ、「答え」が書かれている中のまとまりから「問い」になりそうな一文を見つけさせ、「問い」につなげた。
9	２２	第４回授業研究（６学年） 算数「円の面積」 授業者　教諭　谷川泰史	３通りの式の中にある共通の数字に着目させ､隠れている既習の図形に気づかせることで、複雑な図形の解き方を考えさせた。
9	２９	第５回授業研究（１学年） 国語「うみのかくれんぼ」 授業者　教諭　佐々木広美	「場所」「体の特徴」「隠れ方」のセンテンスカードを並べ替えさせることで、生き物の体の特徴と隠れ方のつながりに気づかせた。
1	１８	第６回授業研究（５学年） 算数「速さ」 授業者　教諭　石村飛生	道のりと時間を使うと、速さを求められることに気づかせ、数をそろえるために単位量当たりの考え方を使うことで、速さを比べさせた。

(2) 一般研修

月	日	研修内容	講師
6	2	生徒指導における児童の共通理解について 特別支援教育について（授業参観・情報交換）	本校教諭　宮古和行 本校教諭　小泉由香利
6	３０	外国語教育について（授業参観・講話）	本校教諭　小橋共絵 三浦祐子
8	２０	１人１台端末の活用について（演習・講話）	総合教育センター 主任指導主事　石井一二三
1	１２	算数科における授業づくり（演習・講話）	初任者指導教官　峯明紀
2	１６	学年研修報告会	各学年の授業者

６　研究の成果

(1) 「問いを生み出す工夫」では、興味関心を引く教材を工夫したり、ゆさぶりの発問を工夫したりすることで、子ども達の思考のズレが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題に取り組む児童が増えた。

(2) 「見通しをもたせる工夫」では、既習事項を効果的に活用したことで、問いの焦点化を図ることができた。また、見通しをもたせたことで、低位の子も問いを共有し、学習課題に向かうことができた。

７　研究の課題

(1) 課題解決の見通しを子ども達が自力で導き出すのは難しく、教師主導になりすぎたり、見通し待ちの子がいたりする傾向が見られた。教師は手立てを多数準備しながら、児童の実態や反応に合わせて、与える内容や量を精査する必要がある。

(2) 「問い」を生み出す時間、自力解決の時間、練り合いの時間、振り返りの時間のバランスが難しい。発問・指示を吟味したり、意図的な指名をしたり、与える教材を精選したりしながら、問題解決的な学習をこれからも進めていきたい。　（記入者　横沢　深雪）